



病棟に隣接する本館の三階。開け放った窓から下を眺めている医師がいた。

「何か面白いものでも見えまして、先生」

カルテを整理しながら若い看護師が聞いてくる。

「ん…ああ、イヤ、別に何が見えるという訳じゃないんだが。チョット、ね」

「また悪い虫が騒ぎ出したんじゃないかって。この間も先生ったら『今度B棟に入院した若奥さん、精密検査が必要だっ  
ていうからウチのほうへ来ないかな〜？』って今にも涎を垂らしそうだったじゃないですか」

白衣の医師が思いきり顔をしかめた。

「涎はひどいなあ、せめて涙を流してくらいにならないかね？」

「余計にアヤシイです」

軽く微笑みながら彼女は医学雑誌の束を渡した。

「今月号、先生の論文が載っているんでしょ？ オメデトウございます。ちゃんと御自分の目でお確かめになって下さいね」

「自分で書いた論文だぞ、何でいちいち読み返さなきゃならないんだ」

「成果の確認です」

「目出度いと思うなら、今度ふたりで御祝いしないか？ 横浜に素敵なレストランを見つけたんだ、夜は港の灯りが綺麗で…」

看護師がクスリと笑った。

「謹んで御遠慮させていただきます」

「そんなあ！ キヌちゃ〜ん」

「気持ち悪い声を出さないで下さい。それに、その呼び方は止めて下さいと何度も御願いしましたよね？ せめてエミちゃんとか呼んで下さいませんか」

「呼び方変えたら朝まで付き合ってくれる？」

「フ・ケ・ツ」

にべもなく誘いを断った彼女、衣笠恵美子は何気無く窓の外を見た。

「アラ、あの子たち」

「そうなんだ。さっきからスロープで立ち話をしているように見える。だが、なあ」

「彼女、確か歩行障害と一緒に…」

「失語症を併発している。よほど怖い目に会ったのだろう、可哀想に。相手は通り魔だったらしいが」

「…」

「彼が話し掛けるのは珍しくないんだが、ちと相手が悪いな」

「?どういう意味ですか」

恵美子は理解出来ないと言うように首を傾げた。

「不思議な少年でね。ああやって接触をもつ事で今まで何人もの患者を全快に導いてきたんだ。僕らは密かに彼の事を『幸福の王子』と呼んでいるくらいだ。だがなあ」

医師が表情を曇らせる。

「彼女は無理だ」

「どうしてそう思われるのですか」

「それは…」

医師が言い淀んだ。

溜め息をひとつ漏らしてから、彼は恵美子に向き直った。

「あの娘の場合、肉体の損傷時の状況が同時に強烈なトラウマとなってしまうている。強い自己暗示とでも言え  
いか。そのせいで現状が常態化されてしまっているんだ」

「現状の…常態化？」

「判り易く言うとな」

彼は机の上にあったジッポをとりあげ窓枠に置いた。

「車が走ってくる。たまたま道を渡っていた人が運悪くはねられたとしよう」

窓枠にジッポを滑らせ、二本の指で人に観立てた左の手を弾いてみせた。

「バンッ！ 車はそのまま走り去っていった」

「ヒドイ… 轢き逃げですね」

「その人は幸いにして命を拾った。目立った障害もなかったので比較的早く日常生活に戻る事が出来たんだ。でも後遺  
症は思わぬ形で現れたんだよ」

「？」

「その人はタクシーの運転手だったんだが、二度と元の仕事には戻れなくなってしまったんだ」

「車への恐怖心が生まれた、とかいう話なのでしょうか？」

「イヤ、そうじゃない。運転が出来なくなったんだよ。手足が動かなくなるなんて生易しいものじゃない、意識を失な  
ってしまうのさ。車種、座席位置、状況や誰と一緒にかなど全くお構いなしに、車に乗った途端、昏睡状態に陥ってしま  
うんだ。事故直後にそうだったようにね」

「そんな事って… その人は健康面で問題は無かったのでしょうか？」

「脳にも躰にも異常は見つけれなかった。医学的には何の問題も無い健康体だったよ。だが症状は100%再現さ  
れた」

ジッポをポケットにしまいながら、医師は再び窓の外に視線を移した。

「例え話かと思ったのですが。実際にその方を診察されたのですね、先生は」

「ああ。PTSDよりタチが悪いよ。結局は原因も治療法も、何ひとつ判らずじまいで終わってしまったがね」

医者なんて無力なモンさと自嘲気味に笑い、医師は遠くに見える二人を目で追った。

「精神科の友人がね、自己暗示の一種じゃないかとアドバイスしてくれたが、お手挙げだった事に変わりはない。強烈  
な経験は、その強烈さ故に身心に焼き付いてしまう。あの王子さまにどんな不思議な力があつたとしても『自分はこう  
である』と当たり前のように信じ込んでしまっている相手に何が出来るとも思えないよ」

「でも、何か他に治療方法があるんじゃないですか？ ずっとこのままなんて…」

医師が首を振った。

その目は、二人をいつまでも見つめ続けていた。

